

| | |
|------------------|---|
| Title | 黒人奴隷のヴォランタリー・アクションに関する予備考察 |
| Author(s) | 柴田, 史子 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所紀要, No.8, 1996.1 : 49-73 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3387 |
| Rights | |



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

黒人奴隷のヴォランタリー・アクションに関する予備考察

柴田史子

はじめに

アメリカ合衆国における自由の拡大のプロセスを考えると、黒人奴隷の解放は旧世界からの植民、イギリスからの独立と並ぶ重要な出来事である。奴隷の解放に関しては、北部を中心にして奴隷制廃止を訴え奴隷を解放するために活動する多くの団体が成立し活躍したことがよく知られているが、これら白人主導の人道主義的な立場からの奴隷解放運動が展開される中で、南部の黒人奴隷たち自身は何をしていたのであろうか。彼らは、「自由」の何たるかを知らず、黒人が奴隷とされることを自明の理と考え、そのような運命を甘受していただけなのだろうか。

本稿は、奴隷制の中で奴隷に甘んじ、自分達の自由のためには何もなし得なかったという印象を持たれがちな奴隷達が主人たちの妨害にもかかわらず独自の文化を發展させ、自らの選択的意志に基づいて活動していたことを示そうとするものである。更に、彼らのそうした行為の特質を類型論から論じ、解放後の黒人運動に寄与する可能性を探る一歩と

したい。

一 黒人をめぐる一般的社会状況

北米大陸に黒人が最初に連れてこられたのは、一六一九年、ヴァージニアにオランダ船によってであったとされている。その主な供給地は、北緯一五度から南緯一五度に至るアフリカ西海岸で、人口が稠密で幾多の王国が成立してきた地域であった。⁽¹⁾ ヨーロッパ人は自ら上陸して黒人を生け捕りにするよりも、他部族の者に捕らえられた者をヨーロッパから運んだ商品と交換するという方法で黒人捕虜を獲得したのである。

こうして連れてこられた黒人たちは、はじめは他の白人労働者と同様に年季奉公の労働者として雇用された⁽²⁾が、次第に世襲奴隷の身分に落とされていった。⁽³⁾

独立は黒人にとっては必ずしも自由と平等を意味しなかったが、北部諸州では漸進的奴隷解放を規定する法律が制定され、一七八七年の北西部領地条例によって西部に新たに生まれようとしている州に奴隷制度が広まることが阻まれた。さらに奴隷の輸入が禁止されるようになっていった。南部では、奴隷所有者の財産権という考え方から奴隷制度が廃止されることはなかったが、個人のレベルでの奴隷解放は進んだ。このようにして、自由黒人の数は急速に増大したが、自由を獲得することと白人と対等に扱われることとは別であった。⁽⁴⁾

また黒人は先天的に能力の低いものとみなされて、奴隷制反対協会によってさえ黒人を卑しい身分にとどめておく教

育が白人とは別の機関で提供され、社会的にも様々な差別待遇を受け続けたのである。

南部の状況はさらに黒人にとって苛酷であったが、それについては次項で触れることにしよう。

二 南部の黒人

南部の社会は、主として大奴隷所有者の白人エリート集団、小奴隷所有者、貧困白人、自由黒人、黒人奴隷と、少数のクエーカー教徒やモラビア派の信者、スコットランド系アイルランド人から構成されていた。そして、独立の精神に影響されて個人のレベルでの奴隷解放が進み、奴隷制は廃止へ向かって進んでいるかのよう⁵に思われた。しかし、一七九三年に綿繰機が発明されると奴隷に対する需要は大きくなり、他方では奴隷貿易が禁止されたために、奴隷の価格は高騰し、財力のある者にしか購入できないものになった。その結果、大プランテーションが成立することになり、そこに奴隷居住区がつくられていくのである。⁶そして、奴隷に対する規制は従来にもまして厳しくなったが、財産価格の高くなった奴隷の日常生活での待遇は改善される傾向が見られる。南部の黒人のなかには、自由黒人と奴隷がおり、奴隷は、都市に居住する者とプランテーションに居住する者に分けられる。

自由黒人は、公職に就くこと、投票（テネシーでは一八三四年まで、ノース・カロライナでは一八三五年まで認められていた）、火器の使用、飲酒、夜間外出、教会以外での集会、自由な往来を禁止され、白人の保護者を持つことを義務づけられていた。⁷彼らの存在は奴隷所有者にとって不都合だったため、彼らをアフリカへ返すことを目的とするアメ

リカ植民協会のような組織が形成されたりすることもあった。また、南北戦争前夜には彼らの地位は特に不安定になり、彼らはしばしば詐欺師の餌食にされ、近隣で起こったあらゆる犯罪のために告発、処罰され、しばしば誘拐されたりもしたため、保護を求めて奴隷になることを希望するものさえ出たという記録もある。

都市の奴隷は概して主人との関係が薄く、自らの労働を賃貸しする。彼らは都市の生活を楽しみ、教会やその他の社会的行事を通して自由黒人と交わることによって自由の感覚を身につけていった。

プランテーションに住む奴隷は、大きく家内奴隷と畑奴隷に分けられ、一部の家内奴隷を除けば大部分は奴隷居住区に住まわされた。一般に家内奴隷は畑奴隷よりも衣食住の条件がよく、読み書きを教えられ、主人の従者として旅行をする機会を与えられる者もあった。家内奴隷として選ばれるのは、肌の色が薄いものや、混血で主人と血のつながりのあるものであることが多かった。この家内奴隷の次に高い地位を与えられたのが、「ドライヴァー」、「フォアマン」と呼ばれる奴隷の班長で、白人の奴隷監督の右腕として働いた。その次に地位を与えられたのは、靴、馬具、大工、鍛冶屋などの奴隷職人で、彼らは技術を持つ、より自立的な存在であった。奴隷の中で最も低い地位にあったのがプランテーションに出て働く奴隷で、彼らは割当制、または組制で労働していた。労働の条件はプランテーションによって多様で、日が出ている限り働かされる所もあったが、一日の割当が終わると奴隷居住区に戻って自分の菜園を耕作することが許され、または残って労働しその分の報酬を得ることができるところもあった。日曜日は原則として安息日で労働を免除され、土曜日の午後が休みであるところもあったようである。反抗的な奴隷には鞭などの懲罰が科されたが、従順でよく働く奴隷には特別に布、食物、通行許可証などの恩恵が与えられたのである。

奴隷はその序列によって異なった度合の自由を与えられていたが、一般に集会の自由を奪われ、武器の使用は勿論のこと合図として使われる可能性のあるドラムやラッパ類の使用も禁じられ、通行許可証無しで主人の土地を離れることも禁じられた。また、読み書きを学ぶことも禁止され、奴隷に読み書きを教えた者も処罰の対象になったのである。

三 奴隷の世界観

トーマス・L・ウェッバーは、『奴隷文化の誕生——もうひとつのアメリカ社会史』（原題は *DEEP LIKE THE RIVERS: EDUCATION IN THE SLAVE QUARTER COMMUNITY, 1831-1865*）で、奴隷が抑圧的な制度のもとでどのように独自の文化を創造し伝えたかを論じている。ここで彼が活用している聞き書き資料は、奴隷たちが独自の文化、世界観を持ち、自由を強く望みながら暮らしていた様子を物語っている。ここでは、白人が奴隷たちに教えようとした世界観と奴隷居住区で伝えられていた世界観を概観し、それを奴隷の子供たちがどのように内面化したかを考察する。

(1) 白人が奴隷たちに教えようとした世界観

奴隷所有者にとっては、理想的な奴隷とは従順で勤勉な奴隷である。それで、奴隷所有者はそのような奴隷を育てるのに都合の良い世界を奴隷に描いて見せた。

リカ植民協会のような組織が形成されたりすることもある。また、南北戦争前夜には彼らの地位は特に不安定になり、彼らはしばしば詐欺師の餌食にされ、近隣で起こったあらゆる犯罪のために告発、処罰され、しばしば誘拐されたりもしたため、保護を求めて奴隷になることを希望するものさえ出たという記録もある。

都市の奴隷は概して主人との関係が薄く、自らの労働を賃貸しする。彼らは都市の生活を楽しみ、教会やその他の社会的行事を通して自由黒人と交わることによって自由の感覚を身につけていった。

プランテーションに住む奴隷は、大きく家内奴隷と畑奴隷に分けられ、一部の家内奴隷を除けば大部分は奴隷居住区に住まわされた。一般に家内奴隷は畑奴隷よりも衣食住の条件がよく、読み書きを教えられ、主人の従者として旅行をする機会を与えられる者もあった。家内奴隷として選ばれるのは、肌の色が薄いものや、混血で主人と血のつながりのあるものであることが多かった。この家内奴隷の次に高い地位を与えられたのが、「ドライヴァー」、「フォアマン」と呼ばれる奴隷の班長で、白人の奴隷監督の右腕として働いた。その次に地位を与えられたのは、靴、馬具、大工、鍛冶屋などの奴隷職人で、彼らは技術を持つ、より自立的な存在であった。奴隷の中で最も低い地位にあったのがプランテーションに出て働く奴隷で、彼らは割当制、または組制で労働していた。労働の条件はプランテーションによって多様で、日が出ている限り働かされる所もあったが、一日の割当が終わると奴隷居住区に戻って自分の菜園を耕作することを許され、または残って労働しその分の報酬を得ることができるところもあった。日曜日は原則として安息日で労働を免除され、土曜日の午後が休みであるところもあったようである。反抗的な奴隷には鞭などの懲罰が科されたが、従順でよく働く奴隷には特別に布、食物、通行許可証などの恩恵が与えられたのである。

奴隸はその序列によって異なった都合の自由を与えられていたが、一般に集会の自由を奪われ、武器の使用は勿論のこと合図として使われる可能性のあるドラムやラッパ類の使用も禁じられ、通行許可証無しで主人の土地を離れることも禁じられた。また、読み書きを学ぶことも禁止され、奴隸に読み書きを教えた者も処罰の対象になったのである。

三 奴隸の世界観

トーマス・L・ウェッバーは、『奴隸文化の誕生——もうひとつのアメリカ社会史』（原題は *DEEP LIKE THE RIVERS: EDUCATION IN THE SLAVE QUARTER COMMUNITY, 1831-1865*）で、奴隸が抑圧的な制度のもとでどのように独自の文化を創造し伝えたかを論じている。ここで彼が活用している聞き書き資料は、奴隸たちが独自の文化、世界観を持ち、自由を強く望みながら暮らしていた様を物語っている。ここでは、白人が奴隸たちに教えようとした世界観と奴隸居住区で伝えられていた世界観を概観し、それを奴隸の子供たちがどのように内面化したかを考察する。

(1) 白人が奴隸たちに教えようとした世界観

奴隸所有者にとっては、理想的な奴隸とは従順で勤勉な奴隸である。それで、奴隸所有者はそのような奴隸を育てるのに都合の良い世界を奴隸に描いて見せた。

まず、彼らは白人の絶対的優越を印象づける。たとえば、彼らは、衣服や食料を直接奴隷に渡すことによって奴隷が主人に依存していることを日々実感させ、鞭による処罰などで圧倒的な力を示し、さらに本人の意志に関係なく奴隷を売却するという形でその権力を誇示する。

また、奴隷制は白人が野蛮なアフリカから黒人を救出し、黒人に文化を与えるための制度であり、神が定めた制度で、黒人は現世では奴隷としての義務を果たすように定められ、特定の白人は現世で神の代理人としての義務を果たすように定められたと彼らは説く。そして、神の代理人である主人への反抗は神に対する反逆を意味し、従順は天国での救いを約束するとされ、キリスト教の同胞愛の側面は注意深くその説教からは外された。

さらに、逃亡した奴隷は必ず捜し出されて逃亡がすべて失敗に終わることを示され、逃亡奴隷に対する厳しい処罰は逃亡への意欲を失わせたのである。そして、たとえ逃亡が成功してもたどり着いた先の北部で人種差別を受けることや、他の州、他のプランテーションで奴隷が一層悲惨な目に遭うことになること、自由黒人の生活が非常に厳しいものであることなどを誇張して語り、逃亡が決して見合うものではないと教えようとした。

奴隷所有者は、上記のような世界観を奴隷が持つように、奴隷が得る情報を制限しようとしている。たとえば、奴隷所有者は彼らにとって都合のよい説教をする者を選んで奴隷に対する伝道師とした。また、彼らは、自由への願望を抱かせる可能性のある自由黒人や、白人すべてが黒人よりも圧倒的に卓越しているわけではないと感じさせる貧困白人と奴隷が交際することを禁じた。そして、奴隷が情報や意見を交換したり、反抗を計画したりする機会となり得る黒人だけの集会を持つことを禁止し、奴隷が自分で知識を獲得する手段としての読み書きの学習を厳しく禁止したのである。

こうして白人は、情報を巧みに操作して奴隷に偏った世界観を持たせ、彼らを教化したつもりでいたのである。しかし、果して黒人奴隷は主人たちが期待した通りの世界観を内面化していたのであろうか。

(2) 奴隷居住区で伝承されていた世界観

奴隷居住区では、白人の意に反して彼らが教えたものとは異なった世界観、文化を発展させていたようである。それは、家族、同年代の仲間集団、居住区共同体、秘密の集会などを通して奴隷に伝えられていた。奴隷居住区の文化、世界観の底流となっているのはアフリカ的な伝統である。主人はアフリカの文化的価値を侮蔑し、否定したが、奴隷居住区ではアフリカ人の血統は誇りを持って受け止められていた。「暗黒の大陸」と言われてきたアフリカでも一六世紀には一種の封建制に基づく国家が成立し、共同体精神に根ざした農業中心の部族生活が展開されていた。ここでも奴隷制が実施されていたが、私有財産の感覚が希薄な上に、貴族は武器を持たないので苛酷な労働を強いることもなく、奴隷自身が奴隷を使うこともできたため、奴隷は子孫の代になると主人の親戚のようになっていったのである。⁽⁸⁾

アメリカに連れてこられた黒人は、その出身地や部族にかかわらず各地のプランテーションに売られて行った。一七世紀末から独立前の時期には、ひとつのプランテーションが抱える奴隷の数が少ない上に、出身地の異なる、異なった文化や価値観を持つ黒人同士やアフリカ生まれとアメリカ生まれの黒人が対立して、奴隷共同体は混乱した。それが奴隷貿易が禁止されてアメリカ生まれの奴隷が増えるにつれて、プランテーションでの混乱は鎮静化し、奴隷の境遇にある者たちの間に共通の文化が誕生していったのである。

奴隸たちの間では、白人は怠惰で不器用であり、黒人がいなければ利益をあげることもできないと考えられていた。そして、白人の境遇は羨まれたが、「白人のようになりたい」、「白人の規範を採り入りたい」といった感情が見られることは稀であった。見知らぬ白人は奴隸商人であることが多く、そうでなくても白人は黒人に幸よりも災いをもたらすことの方が遙かに多かったため、白人とはできる限り関わらない努力がされていた。表面的には巧みに隠していたが白人に対する反感は強く、愛情を抱くことのできる主人でさえ抑圧者とみなされることにかわりはなかつたのである。

奴隸居住区での仲間に対する評価は、集団への忠誠心の強さによって決定される。信頼に足る人物とは、個人的な利害や白人の利益よりも奴隸居住区共同体の利害を優先する人物であり、肌の色が黒いからといって自動的に共同体の他のメンバーから信頼されたわけではない。その居住区で生まれ育った奴隸については比較的容易に仲間の信頼を得られたが、新しく到着した黒人や白人と特別な関係にある黒人は、慎重に判定された。仲間に対する裏切りは追放、恥辱、体罰などの制裁の対象になり、要注意人物には居住区の重要な情報はいっさい流れなくなった。そして、信頼できるメンバー同士は互いに対して親族に対するような感情を持った。若者は働けなくなった老人の世話をし、主人の動向を知る家内奴隸はその情報を流し、フォアマンは鞭打ちを手加減するなど互いの便宜を図っていた。また、売られることのできなくなった奴隸や処罰の対象となった奴隸を隠したり、逃亡奴隸の中継点の役割を果して逃亡を助けたり、売却されて引き離された家族の安否の情報を伝えたりしたのである。ある意味では、奴隸居住区の共同体そのものが一種の家族を形成したとも言えるのであるが、これは、奴隸が主人の都合で売買されるために家族が不安定であったためである。父親が白人で居住区にはいないことも少なくないため、祖父やおじなどが父親代わりをしたり、外から連れてこられた奴

隷が欠けたメンバーを補充する形で居住区の親族ネットワークに組み込まれ、血縁を越えた緊密な結束が生まれていたのである。⁹⁾このように共同体への忠誠心は非常に重視されたのであるが、同時にこの帰属意識の強さが逃亡の障害になったことも事実である。

自由に対する憧れは、奴隷居住区に普遍的に見られるものである。それは、家族生活を楽しむ自由として表されることも、望み通りに好きな場所や好きなときに礼拝できる自由、思うままに行ったり来たりし、他の黒人と勝手につき合える自由、読み書きを学び、子供に教える自由、びくびくせずに自分の意見を述べる自由、白人の監視や酷使、虐待の恐怖からの自由として表明されることもあったが、その底流には、他人の利益のためにただ働きを強いられる一生からの解放、真に人間として認められること、希望のある未来を持つこと、への願望があると考えられる。¹⁰⁾

奴隷たちは、彼らから自由を奪い、労働の成果が労働した者にもたらされない奴隷制の道徳的正当性を疑った。従って、奴隷制のもとでの盗みや破壊は不道徳な行為とは考えられず、また白人に対して犯された罪は不公平な制度への報復として正当化されたのである。

そして、このような不当な制度を正当化する、主人が説くキリスト教は拒絶される。奴隷たちは彼ら特有の霊的世界を持っていたが、秘密の集会などを通して「別の世界から漏れてくるかすかな光」から、神は自由の神であるという観念を得ていた。そして、かなりの数の黒人が、神の選民をすべて自由にすることが彼らの宗教的義務であると考えて、危険を冒して仲間を解放へと導いたのである。

以上のように、奴隷居住区では主人が教え込もうとする世界観と緊張関係を持つ独自の世界観が伝えられ、子供たち

はその二つの世界観を内面化しながら成長するのである。

(3) 世界観の内面化

以上見てきたように、奴隷たちの前には、白人の主人が奴隷に教え込もうとした世界観と奴隷居住区で伝えられていた世界観という緊張関係にある二つの世界観が提示されていたのである。この点、支配者と文化的なルーツを共有していた中世ヨーロッパの農奴が置かれていた環境とは異なっている。奴隷たちがこの二つの世界観のどちらをどの程度内面化するかは、それぞれが置かれていた立場によって様々である。個々の奴隷は、家内奴隷、畑奴隷といった地位や日常生活の体験に基づいて、二つの価値観、世界観の中から自分なりのものを選択、構築する。一般に、主人の近くで生活し他の奴隷と交流する機会の少ない一部の家内奴隷の「エリート」たちは白人の世界観をより強く内面化し、主人の家族や白人社会にその役割モデルを見いだすことが多いが、奴隷居住区に住む奴隷たちは奴隷居住区の世界観を内面化する可能性が高いようである。

先にも述べた通り、主人たちは注意深く奴隷を教育しようとしていたが、それでも大半の奴隷が白人が教えようとしたものよりも居住区に伝わる世界観を内面化したのには、いくつかの要因が考えられる。

第一に、それは、奴隷居住区で仲間と共に過ごす時間の方がはるかに長かったためである。

第二に、白人による教化があまり効果的でなかったためである。主人たちは、どのように語れば彼らの意図が奴隷たちにとって受け入れやすいかということには頓着せず、また奴隷たちが作業終了後の時間をどのように過ごすかには関

心を払わなかった。そして、奴隷がこっそりと自由黒人や貧困白人と物資や情報を交換していることに長いこと気づかず、彼らのうわべの従順さを心からのものであると勝手に思い込んでいたのである。その上、奴隷に教えているものと自分たちの間で受け入れられている価値とが矛盾しており、その矛盾に奴隷が気づいていたことに白人が気づかなかったことが挙げられる。

第三に、奴隷が白人の価値を拒絶したのには、幼児期の環境が大きく作用している。彼らは、プランテーションでの苛酷な労働に耐えられる体力をつけるまで（10才前後まで）は、奴隷居住区での簡単な雑用を課せられる以外は比較的自由な暮らしを許されていた。子供たちは、奴隷であることの真の意味を理解しないまま成長し、分別年齢に達する時期になって奴隷としての運命を受け入れるように強いられたわけである。彼らはなぜ自分たちが奴隷であり、他の者は主人なのかを仲間と語り合い、きわめて自然に奴隷制の不条理を感じ、白人を抑圧者と捉えるようになって、奪われた自由を希求することになるのである。

このような理由から、多くの奴隷が白人の世界観よりも居住区に伝わる世界観を内面化していったのである。そして、同じ世界観を共有する者のみが信頼できる仲間とみなされ、そうした者たちの間でだけ重要な情報が交換されたり秘密の集会がもたれたのである。

(4) 奴隷たちの抵抗の諸形態

こうして奴隷の大半は、奴隷制の不条理を痛感しながら苛酷な労働に耐えていた。白人の圧倒的な力の前で表だって

抵抗することは稀であったが、自由になることを夢に見て、ほんの少し白人を出し抜くことに喜びを見いだしていたのである。そうした奴隷たちの抵抗の諸形態をここで概観したい。

奴隷の抵抗は、大きく個人的抵抗と、集合的抵抗に分類できる。

個人的抵抗は、通行許可証無しに主人の土地を離れることや、盗み、破壊、放火、労働への非協力（仮病、仕事を覚えられない振り、サボタージュ）、一時的または永久的な逃亡といった形をとる。

一方、集合的な抵抗は、上記の個人的な抵抗への協力に加えて、集団的なサボタージュ、盗み、集会盗み（秘密の集会をもつこと）、反乱、逃亡の幫助、そして逃亡による集落の形成などの形をとる。集団的なサボタージュは日常的に行われた。これは、彼らに勤労倫理が欠如していたためではなく、不当な労働への非協力の意志表明なのである。彼らは処罰を逃れるために、プランテーションでの労働を課されていない子供に歌で見張りの到来を知らせる合図を送らせた。また、盗みは、多くの場合、子供時代に同年代の仲間集団と共に最初に体験されるが、本来自分たちが得るべき労働の成果を取り戻すだけであると考えられて罪悪感を持たれなかった。

ハツシュユ・ハイ・ミイ・テイ・ソウ
秘密の集 会は、週二、三回最後の見張りの一時間後の午後一時頃から開かれた。白人の監視のないところで

奴隷が集会をもつことは禁止されていたので、こうした集会を開くことは「集会盗み」と呼ばれたのである。集会の場所や時間は歌などを使ってメンバーにしか分からないように伝えられた。⁽¹⁾メンバーとして受け入れられるのは、集会と礼拝者の身元の秘密を守る者に限られた。信用に足る人物でも、家内奴隷のように始終白人の訪問を受けて不在を発見されやすい立場にある者は、集会に参加することが少なかった。また、開会の時間が遅いことや秘密を守る必要から、

子供が参加することは稀であった。集会のリーダーになったのは多くの場合、説教師であったが、主人によって定められた説教以外の教義をこっそりと説明しようとしなかったり、教えることができないような者には奴隷は従わなかった。奴隷の喜怒哀楽を体験し、彼らの価値観や生き方を身につけた人物であると思なされなければ、彼らの信頼を得られなかったのである。適当なリーダーが見いだせない場合、長老集団が協同で集会を指導したり、メンバーが交代で信仰告白をおこなったりした。また、説教の術に長けた訓戒師は、奴隷居住区を渡り歩くこともあった。そのような場合、その訓戒師は重要な情報運び手となった。集会は宗教的な性格の強いものだったが、特定の宗派と結びつくようなものではなく、宗教的、世俗的に仲間を教化することを目的としていた。集会では、奴隷の日々の体験に対する所見が述べられ、救いへの道が示され、自由が約束された。複数の奴隷居住区から人が集まる場合には、情報交換が行われた。また、祈禱や歌（靈歌）、信仰証言と全員で聖霊を感じる事が重要な位置を占めており、メンバーは積極的な参加……声と共に身体も……を求められた。こうした集会において、奴隷たちは信頼できる友人や親族に囲まれることによって、平和、恍惚、親交、自由などを体験し、自分の考えを述べ、宗教感情を証言し、悩みを打ち明け、恐れ・喜び・希望を聴き手と分かち合ったのである。そのことによって奴隷は、奴隷としての生活という試練と苦難からの一時的逃避を得たのである。また、このような集会によって奴隷の間にリーダーシップが培われたことが予想される。

奴隷の反乱は、常に白人の恐怖の対象であった。各地で大小様々な反乱が起こっているが、特に一七九〇年代のハイチでの奴隷革命が成功すると、勇気を得たアメリカの黒人は大規模な反乱を計画している。中でも一八三一年ヴァージニアで起こったナト・ターナーの反乱は人々を震え上がらせ、奴隷に対する規制が強化されることになった。一方奴隷

の生活条件は改善された。奴隷としての運命を受け入れやすいものにするためである。

逃亡は、個人で行われる場合も集団で行われる場合もある。一般に、アメリカ生まれの奴隷は個人で逃亡することが多く、アフリカから連れて来られて間もない奴隷は共同体精神から集団で逃亡することが多かった。奴隷の身分からの解放が逃亡の動機であることは言うまでもないが、家族と引き離された奴隷が家族と再会しようとして逃亡することも少なくなかった。逃亡に成功した奴隷は、マルーンの集落、北部自由州、カナダを目指した。

逃亡奴隷にとって最も手近な避難場所は、マルーンの集落である。「マルーン (maroon)」とはもともとは「(海賊が罰として) 孤島に置き去りにする」、「家畜が逃げて野生に戻る」という意味で、西インド諸島やギアナの山中に住む黒人を指す言葉として用いられ、人里離れて住む白人の迫害を逃れた「インディアン」や、年季奉公人の生活から離れたアイルランド移民、逃亡奴隷に対する呼び名としても用いられた。このようなマルーンの集落は、白人の人口が希薄な郊外のフロンティアに形成されていた。黒人が年季奉公人から奴隷の身分へ押し込まれるようになった一七世紀後半以降、マルーンの集落に占める逃亡奴隷の割合が大きくなっていった。黒人の集落は白人の支援によって北部にも建設されたが、南北カロライナ、ヴァージニア、ルイジアナ、フロリダ、ジョージア、ミシシッピ、アラバマなど南部各地にも数多く存在していた。こうした集落は、構成メンバーの多様な文化的背景を反映しながらも軍事的、政治的に団結をしていたという記録が残されている。それらの集落は恒久的な開拓地という形をとるものや、近隣のプランテーションに対する襲撃の拠点となるものなど様々で、ほとんど独立国のような自律性を持って独立革命や南北戦争において独自の立場をとるものもあった。宗教的にもアフリカ的な色彩の強いキリスト教やイスラム教が見られ、その性質は

様々であった。そして、どの居住区も逃亡奴隷に隠れ家を提供したり、北部やカナダへ逃げて行こうとする者に休息を与えて「地下鉄道」の「駅」の役割を果たし、また時には反乱を援助することもあった。このような集落では黒人が支配的な位置を占め、共同体運営の訓練を受けることになる。

マルーンの集落での生活に飽き足らない逃亡奴隷は、「地下鉄道」の助けを受けながら北部自由州を目指し、さらには合衆国の法の及ばないカナダへと逃亡する。

また、南北戦争が始まると、連邦軍のいるところも奴隷たちの逃亡先になった。特に、連邦軍が深南部の沿岸地帯を占領したり、境界州で戦術的展開をするようになると、何千人もの奴隷が主人を捨てて連邦軍の保護を求めた。また、連邦軍の侵攻が間近に迫ったことを知って逃げた主人に置き去りにされた奴隷たちも、大挙して連邦の旗の下に身を寄せた。こうした奴隷たちの処遇をめぐっては多くの論議を生じることになったが、「戦時禁制品」contraband of warとして処理されることが多かった。彼らは正規兵や非戦闘員として徴用されたり、コントラバンド・キャンプに収容されて、多くの場合連邦軍の従軍牧師などの指揮のもとで共同体を形成したりして、自治の訓練をしたのである⁽¹²⁾。

この時期には五人に一人の奴隷が逃亡したとされ、それが南部に与えた経済的、心理的影響は甚大であった。南部は主要な労働力を失い、さらなる逃亡を防ぐために見張りを増やさなければならなくなった。そして、主人たちが愛情をかけ、信用していた奴隷たちでさえ主人を裏切って逃亡したということが、主人たちに衝撃を与えた。多くの利益を生み出し、従順だと信じていた奴隷はいまや危険な存在になったのである。こうして、南部の経済と文化を支えてきた奴隷制度は内部から崩れていったのである。しかし、逃亡した奴隷たちは、自分たちの行為がこのような効果を持つと予

測して意図的に行動を起したとは思われない。

以上のような奴隷による抵抗は、「二つ以上の選択肢から自由に、そして意識的に一つの選択肢が選ばれた行為」であり、「生物・社会的に決定されたり社会・政治的に拘束されたり経済的に決定されたものではない行為」であるという点で「ヴォランタリー」な行為だと言える。⁽¹³⁾

次に、奴隷たちのこれらの行為を「ヴォランタリー・アクション」の類型から考察していくことにする。

四 奴隷たちのヴォランタリー・アクション⁽¹⁴⁾

ここでは、奴隷たちの抵抗の諸形態をヴォランタリーな行為ないし運動として、ヴォランタリー・アクションの類型の中に位置づけることによってその特質を理解し、解放後の黒人運動の可能性を探る一助としたい。

(1) 運動の発展段階からみた奴隷の抵抗

これまで概観したように、奴隷たちの抵抗は社会的制約の社会的制約のために比較的小さな集団としてとどまらざるを得ず、組織として成長することにも限界があった。

ロウィは、社会集団の組織化の過程を次の三つの段階をたどるものと捉えている。⁽¹⁵⁾ 第一の初源的な運動体の段階では、集団は、情緒的に統合されたゲマインシャフト的な性格を持ち、メンバーの自発的な行動に支えられる。そして、メン

パー同士の関係はほぼ対等で、集団はあまり機能分化をしていない。第二の段階では、創設者の小集団に新たなメンバーが加わることになり、集団の目的が明示されることになる。新たなメンバーと集団とは契約的な関係で結ばれることになり、集団はゲゼルシャフト化（アソシエーション化）する。ただし、集団が追求する共通の目標と、その新旧のメンバー個人の参加行動の動機とは必ずしも一致しないこともあり得る。第三の段階にはいると、集団は利益集団になり、官僚制化が進んでリーダーは管理者の性格を強めることになる。もちろん、社会運動のすべてがこのような過程をたどるわけではなく、組織化されないままにとどまるもの、当初の目標を達成したり一定の活動を完了させて解散するものもある。しかし、追求している目標が容易に達成されるものではない場合には、運動体は物質的、組織的基盤を必要とするようになり、前記のような展開を見せることになるのである。

奴隷居住区での奴隷たちの秘密の集会は、奴隷に許されている交流の範囲が限られていたために、新しいメンバーのほとんどを同じ居住区から補充しなければならなかった。そして、活動そのものが秘密で行われなければならなかったので、補充される新しいメンバーは、すでに参加しているメンバーの家族であったり、メンバーの信用を得ているものに限られた。それで、集会のメンバーは少数数であり、集会は前記の第一段階にとどまることを余儀なくされたのである。

奴隷の反乱もまた、白人の圧倒的力の前に、生きながらえて第二、第三の段階へ発展していくことはできなかった。

これに対して、マルーンの共同体は外界からメンバーを受け入れ、独立した組織として運営されるようになっていく。つまり、第二、第三の段階へと発展し得る可能性を持っていたのである。

(2) ヴォランタリー・アクションの類型からみた奴隷の活動

佐藤慶幸は、ヴォランタリー・アクションとみなされる行為を次のようなタイプに分類している。⁽¹⁶⁾

① サービス志向型……直接に他者、あるいは自分自身を助けようとする行為

a 制度的プログラムにむすびついたもの……フォーマルな組織（教会、刑務所、学校、病院、福祉機関など）の持つ

ヴォランティア・プログラムに基づく行為

b 自律的サービス集団の行為……集団が自律的にサービスを提供するもの

c 自助的サービス志向型……前記 a b のような「慈善的サービス」タイプに対して問題や状況を自らの手で解決し改

善しようとする自助的行為

② 公共的争点志向型……社会のより多くの人々や集団にとって問題となっていたり問題になり得る社会的、経済的、

政治的源泉に焦点を当てるもの

a 情報提供的あるいは啓蒙的なもの……争点に対して相対的に中立的で、それに対して人々の関心を高めることを第

一の目的とするもの

b 政治的キャンペーン型……特定候補者や政党、あるいは投票で決められる諸問題のために行うもの

c 争点変革志向型……政府の政治的意思決定に影響を及ぼし、その決定を変更させようとするもの

d 権利主張型……問題が行為者の個人的利害関心に直接関わるもの

③ 自己充足型……他者や社会のために何かをなすというより、活動そのものが目的であるもの

a 文化的クラブ活動……音楽、芸術、演劇、学習に関するもの

b ソーシャル・クラブ活動……メンズ・クラブ、友愛クラブのような社交クラブ

c レクリエーション・クラブ活動……スポーツ、趣味、ゲームを楽しむもの

④ 職業関連志向型……自己の職業領域やその経済的利益を守り高める活動

a 専門職に関連するもの……学会、弁護士会のようなもの

b ビジネスに関連するもの……商工会、経営者団体のようなもの

c 労働組合活動

⑤ 募金活動

a 一般的な募金活動

b 特定目標のための募金活動

さらに、サービス志向型の活動と公共的争点志向型の活動を運動型のヴォランタリー・アクション（ゴードンらの手段的アシエーションに相当する）として特徴づけている。そして、歴史の趨勢は、現存体制の矛盾や問題を糊塗、補完したりその機能を代行する慈善的サービス集団（制度的プログラムにむすびついたもの）と自律的サービス集団（自主的集団（自己変革）や公共的争点志向型（社会変革）の集団にとって代わられる方向に向かうと論じている。また、慈善的サービス理念に支えられた愛他的な集団は、結局はサービスを必要とする人々を生み出してきた現行システムを

そのままにしてそれを補完し、サービスの受け手の自発性の発現を抑えてしまう傾向があると指摘している。⁽¹⁷⁾

奴隷たちの抵抗の諸形態は、このような類型のいずれに分類されるだろうか。秘密の集会は、メンバーの宗教的、世俗的教化や体験の共有を目的とする自己充足型の活動だといえることができる。また、反乱は公共的争点志向型の権利主張型に位置づけられる。マルーンの共同体は、サービス志向型の自律的サービス集団、または自助的サービスを志向するものだったと言えることができる。逃亡という行為そのものは一過性のものであるうえ、積極的な目的を達成するための行為ではないため、この類型の中に位置づけるには適さないが、地下鉄道で逃亡を助けるような活動はサービス志向型の自律的サービスに分類することができる。

これらの中で、積極的に外界に働きかける性質を持つ反乱というヴォランタリー・アクションは長期にわたって存続することが困難だったが、他は白人から黒人を隔離することによって存続し、非人間的な制度の中で彼ら自身と家族、仲間の身を守り、人としての尊厳を保つ場を提供したのである。

五 解放後の黒人のヴォランタリー・アクション

南北戦争での北軍の勝利と奴隷の解放は、奴隷が求めていた自由……家族生活を楽しむ自由、好きな場所や好きな時に礼拝できる自由、従来からの自由、他の黒人や白人と勝手につき合える自由、読み書きを学び子供に教える自由、びくびく

せずに自分の意見を述べる自由、白人の監視や虐待の恐怖からの自由、不当な労働からの自由……が奴隷にもたらされた。奴隷解放を目的としていた運動は、当初の目的を達成して新たな局面を迎えることになる。目標達成を機に運動を解散するのか、新たな目標を設定して運動を続けるのか。北部の白人達の運動はこうした岐路に立たされたのである。

では、奴隷達のヴォランティア・アクションはどうだったのだろうか。奴隷解放と憲法修正はまず反乱と地下鉄活動の存在意義を失わせた。しかし、秘密集会は、集会を持つこと自体がその目的（自己充足型）であったために、黒人の境遇の変化が大きな影響を持つことはない。むしろ、秘密集会はもはや秘密に活動する必要がなくなり、宗教活動としての本来の性格を開花させることになる。そして、それらは公に活動する機会を得て、小さな地域共同体の枠を越えてメンバーを獲得することができるようになる。しかし、メンバーの増大は、時に組織化（運動の第二段階への移行）を伴うこともあり、そのことが運動の性格を変えることもある。

マルーンの集落もまた、その存在を認められることになり、準自治体、自治体としての地位を獲得する可能性を得た。しかし、主として逃亡奴隷によって形成されているマルーンの集落にとって、奴隷解放は集落存続の危機にもなり得る出来事であった。一方、このマルーンの集落とは別に、解放民局の推進する政策や南部自営農地法に支えられて、解放黒人たちが各地に土地を購入し黒人の自治体、準自治体を建設する動きがみられた。こうした土地と結びついた運動は、次第に運動体としての性格を弱め、制度の一部になっていく。

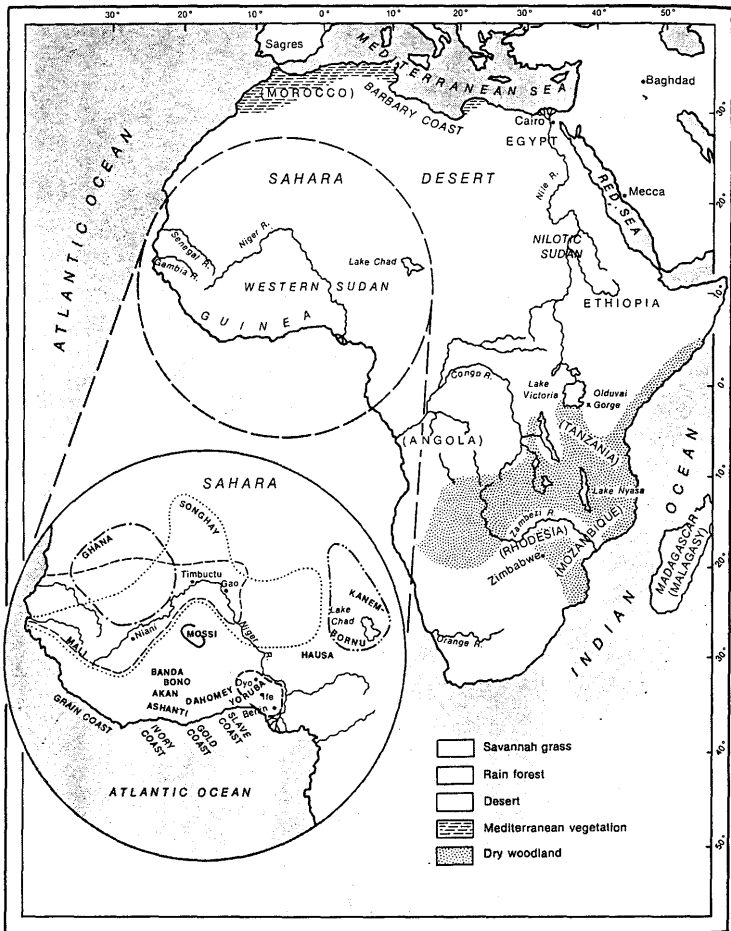
このように見てくると、南北戦争後の南部社会では、秘密集会だけが存続する可能性を得ていたということが出来る。

むすびにかえて

解放された黒人たちは、教育（学習）と信仰に多くのエネルギーを注ぐ。彼らの信仰心は秘密集会から発展した黒人教会にその発露を見いだした。また、黒人の学習熱は黒人のアメリカ社会への同化を望む政府や白人の諸団体に支援され、B・T・ワシントンのタスキギー実業教育大学のような教育機関を生んでいった。しかし、教育は必ずしも彼らに雇用を保証せず、彼らは人種差別という新たな問題に立ち向かわなくてはならないことを知った。つまり、教育のような自己変革だけでなく、社会の変革も必要であると認識されるのである。南部の黒人がそうした認識に基づいて社会変革を志向する行動を起こそうとしたとき、彼らに入手可能だったヴォランタリー・アクションは南部の教育機関（サービス志向型）、黒人教会（自己充足型）と南北戦争以前から活動していた北部の黒人組織（公共的争点志向型）だった。各タイプの組織がこうした南部の黒人の必要にどのように対応していったのかの探求を今後の課題としていきたい。

注

- (1) 西アフリカには四世紀頃からガーナ古王国、マリ、ソンライなどの大王国やベニン、ダオメーなどの王国が成立していた。主な奴隷供給地になったのは、ギニアと称された密林地帯で、その他、マダガスカル、モザンビーク、アンゴラ、コンゴ川流域などが奴隷を供給した。Rayford W. Logan & Irving S. Cohen, *The American Negro-Old World Back*



ground and New World Experience (Boston: Houghton Mifflin Company, 1970, 1967), p. 9. また、地図参照 (Ibid., p. 6)。

(2) 年季奉公人は二、七年労働した後、衣服、少額の金銭、または一区画の土地を与えられ、Benjamin Quarles, *The Negro in the Making of America* (New York: Macmillan, 1987), p. 34.

(3) マサチューセッツ一六四一年、コネチカット一六五〇年、ロードアイランド一六五二年、ヴァージニア一六六一

年、メリーランド一六六四年、ニューヨーク一六六五年、サウス・カロライナ一六八二年、ニュー・ハンプシャー一七四年、ノース・カロライナ一七一五年、デラウェア一七二一年、ジョージア一七四九年。北部での奴隷制の成立が意外に早いのは、アフリカから南部へ黒人を運んだのが北部の貿易商人であったためで、北部が奴隷の労働力を大いに吸収したということではない。また、ペンシルヴァニア、デラウェア等の中部植民地では英領になる以前、または領主に下付される以前から奴隷が存在したために奴隷制度を容認せざるを得なかったという事情がある。猿谷要『アメリカ黒人解放史——奴隷時代から黒人革命まで』、サイマル出版会、一九八一年、一九〜二〇ページ。

(4) 自由黒人は一七九〇年五九、五五七人、一八〇〇年一〇八、四三五人、一八一〇年一八六、四四六人、一八二〇年二二、六三四人、一八三〇年三一九、五九九人、一八四〇年三八六、二九三人、一八五〇年四三三、四九五人、一八六〇年四八八、〇七〇人存在した。そのうち南北戦争前夜には二五〇、七八七人が南部に居住していた。アメリカ合衆国商務省『アメリカ歴史統計』、原書房、一九八七年、一八ページ、および本田創造『アメリカ黒人の歴史』、岩波新書、一九九一年、八一ページ参照。

(5) 一八四〇年までに、黒人はマサチューセッツ、メイン、ニュー・ハンプシャー、バーモントで選挙権を獲得し、またニューヨークでは一定の不動産を持つ者にのみこの選挙権が与えられていたが、その他の州では投票権は与えられなかった。これに対して、白人男子の普通選挙権は一八四〇年までにはほぼ認められている(但しロードアイランドは一八四二年、ニュー・ジャージー一八四四年、ヴァージニア一八五〇年、ノース・カロライナ一八五六年)。

(6) 一八六〇年当時、南部デラウェア、ケンタッキー、メリーランド、ミズーリ、ノース・カロライナ、テネシー、バージニア、アラバマ、アーカンソー、フロリダ、ジョージア、ルイジアナ、ミシシッピ、サウス・カロライナ、テキサスの一五州の白人人口のうち奴隷を所有するものは五パーセントにもみたく、五〇人以上の奴隷を所有するものは〇・一パーセント、一〇〇人以上の奴隷を所有するものに至っては〇・〇二パーセントに過ぎなかった。つまり、ほとんどの白人が奴隷を持たず、奴隷を所有する白人の九〇パーセントは五人以下しか奴隷を持たず、その奴隷と共に畑に出て勞

働していたのである。

(7) 自由黒人の中には、奴隷を所有するものもあった。Charles, op. cit., p. 90.

(8) アフリカでは拡大大家族が共同体形成の核になっており、小さな部族では家長の合議に基づいて統治が行われていた。より大きな社会では、世代別に集団が形成され、それが社会の基本単位となって統治が行われたり(東アフリカ)、世襲の支配者によって統治されたりしていた。しかし、土地や家畜は共有財産とみなされていた。Logan, op. cit., pp. 12-14.

(9) Philip S. Foner, *History of Black Americans* (Westport: Greenwood Press, Inc., 1975), vol. 2, pp. 127-128.

(10) Cf. Thomas L. Webber, *Deep Like the Rivers—Education in the Slave Quarter Community, 1831-1865* (New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1978), Ch. 12.

(11) たとえば、秘密集会の招集は“steal away, steal away, steal away to Jesus”という歌詞などによって伝えられた。Foner, op. cit., vol. 2, p. 123.

(12) 渡辺真治『フロンティアと黒人自治体の建設——分離主義と地方自治を中心として』、近藤出版社、一九八九年、三八ページ、および五〇―五二ページ参照。

(13) 佐藤慶幸『アンシエーションの社会学——行為論の展開』、早稲田大学出版部、一九八二年、八一―八五ページ。

(14) ここでは、組織にまで発展しない運動まで考察の対象とするために、「ヴォランタリー・アンシエーション」のかわりに「ヴォランタリー・アクション」という語を用いる。

(15) Cf. Theodore J. Lowi, *The Politics of Disorder* (W. W. Norton, 1971), pp. 36-50.

(16) 佐藤慶幸、前掲書、九一―九四ページ。

(18) 同上書、一二六ページ。